

郷土産業考察の一例 (下)

淡 川 康 一

グレーデン (Gröden) の玩具は、以前から、極めて狭い範囲に制限されて居り、松属を素材として、大量生産された、可なり粗朴に彫刻された動物の型が、その基本を成して居た。故に、外国で玩具商を営んで居た、グレーデン (Gröden) の人々は、早くから、オーベルアムメルガウ (Oberammergau)、『ヘルヒスガーデン (Berchtesgaden)』、『ボヘミア (Bohemia; Röhmer)』及びサクソニア (Saxony; Sachsen) 等の、他国よりの注文に対しては、自国の商品を、基本として、是を、補充す可き必要に、追られたのである。又、着色の上塗りを、する為めには、粗野な彫刻家を、前掲・バヴァリア (Bavaria; Bayern) の上部に於ける彫刻地域へ送付していたが、此のことは、フランツ・ルンガルディール (Franz Rungaldier) と云う人が、溪谷自身に於いて、着色を移入してからは、止まつたのである。自来、本来の作業が、二個の部分、即ち、彫刻と着色とに分たれ、後の部分は、それが、殆ど、立替金を、必要とせない為めに、大抵、独身の婦人及び少女によって、営まれたのである。彫刻者の側に於いては、労働の特殊化が、行われ、各人は、常に、唯、同じ対象のみを、完成し、例之、一人の人は、唯、木馬だけを、又、他の人は、車のみを、更らに、第三の人は、人形、或いは、聖像だけを、作るのである。

彼の、ゾンネベルグ (Sommerberg) の場合に見る如く、同一の対象が、手の一系列を経過する様な分業は、此の地方には、見られぬのであって、此のことは、殆ど、繪での彫刻家が、唯、一本の木材から出来ていと云う、商品の性質に、職由するのである。彫刻者の、手の完成は、此の、狭い圏に於いては、驚く可き、高い程度に達するのであるが、是は、殆ど常に依然として、制限された範囲に止まり、父が、彫刻したものを、その子供や、孫が、又、是を、彫刻するのである。かくして、各家、各家族員は、夫々、其の特殊性を、有し、婦人の方の、仕事の堪能性の点では、男を、凌駕することが、屢々である。セント・ウーリヒ (St. Ulrich) に於ける、一老牧師のフィアン (Vian) が、次のことを、報告しているのは、寔に、尤もである、グレーデン (Gröden) に於ける、一人の男が、若し、彼が、勇ましい、彫刻者の女と結婚するならば、財産は、持つて居るが、儲ける可き術を、知らぬ婦人と、結婚するよりも、遙かに、よいであろう」。

若し、数千の人間が、その活動を、絶対的に、かかる価値の少い商品、而かも、その購買者の、僅かの数を有するに過ぎない商品の製作に、向けるならば、ここに生ずる結果は、もはや、描写を、待ずして、明白であらう。僅かの前貸人は、たとい、相互に競争するか、又、その商品を、販売する処の、外部に対してのみ、競争するのみであつて、故郷の溪谷に於いては、彼等前貸人は、驚く程、彫刻者の賃銀を、低下せしめることに、一致するのである。是らの結果に就いては、人は、マイニンゲル・オーベルランド (Meininger Oberland) から報告されたものを、標準として、容易に、推測し得るであろう。彫刻者は、十一月の初めから、六月まで、毎日、妻及び子供と共に、朝六時から、夜十時まで、働らくが、その賃銀は、四〇乃至八〇クロイツァー以上に払ぬのである。然し、一人の子供は、一〇乃至二〇クロイツァーを、得ることが、常である。是等の彫刻者は、最も貧し

い家屋に居住し、その生活状態は、吾人が、想像し得る処の、最も悲凄なものであり、今、是らの事情を、詳述する意図はないが、グレーデン (Gröden) の彫刻者の生活を、稍々、接近して考察することが、一層、仕甲斐があると思う。

吾人は、今、ウーリヒ (St. Ulrich) に居る。それは、盛夏の土曜日である。レッスル (Rissl) の旗亭の窓から、村の広場を、見下し、此の彼方に、緩傾斜の山腹に、散布する、小綺麗な家屋を、眺める。そこには、驚く可き光景が、吾人の視線を、捕えるのである。総ての方面から、女や少女が、峻しい小路の上を、谷へと、重い籠を、肩にして、下つて来るのである。その籠の縁の上には、木馬の頭や、聖像の腕や、半身が、はみ出して居る。彼等は、前貸人の、最大の、向い側の家の中へ歩み入つて、商品を、並べ、数え、かくして、賃銀を、受取るのである。それは、僅かのグルテン (Gulden) であり、是が、経過した一週間に對する、全体の家族の儲けてある。此の僅少の賃銀を、罵らずに受取るもの、前貸人の処で、信用で、商品を、渡すことによつて、「先きに食うパン」を持たぬ人は、幸福である。前貸人の店で、尚お、穀粉や、塩を、買入れてから、是らの群衆は、走り去つたが、吾人は、一人の男の営業所へ来たのである。此の男は、吾人の旅行案内が、或る一定の有名を、保証したのであるが、やがて、吾人は、硝子戸棚のある一室へと、案内される。その戸棚の中には、精巧な彫刻品が、陳列されて居り、是らの商品は、外国から取寄せられたものであり、アルプス (Alps; die Alpen) の、各方面との外国交通の中心点に於いて、「土産物 (Souvenir)」として、販売されているものである。吾人は、かかるものを、此処で、買うことを好まずして、土着の、其の谷に於いて彫刻された商品の店を、見ることを望んだので、やがて、地下室へと、案内され、それから、広い室の一行を通つて、倉庫へ、導かれる。総ての室には、白

い、又は、色付けの、木製品の大量が、置かれて居る。即ち、子供の秤及び車、胡桃を割る道具、指の長さから、腕を伸ばした位置の人形、馬、牛、二羽鳥、要するに、そこで、葡萄うたり、逃げたりしているもの、縋てが、含まれている。その作品は、何れも、驚く可き粗樸性を、有し、かかる人形及び小馬には、多分、黒人の子供のみが、嬉しさを、感ずることであろう。吾人の案内者は、吾人に、稍々、奇異に、次のことを、指示したのである、「是等の人形は、芸術の国・伊太利、上品な趣味の本場・仏蘭西、亜米利加、加之、濠太刺へ行く」。

後刻、吾人は、彫刻者自身を、その住家に訪問したが、此の谷での聰明な青年で、此の地の専門学校の教師をして居るデメッツ氏(Demetz)が、吾人を、遠くの方の、山添いの家々へ導いて吾れた。何れの家も、彫刻に従事しているので、吾人は、より近い処で、見られたかも知れないが、此の谷での、新しい優秀な彫刻者の男及び女を知らんと欲したのである。素晴らしい作品が、八月の太陽に輝いて居り、牧場では、刈草が、乾かされていた。暫し逍遙して後に、吾人は、一軒の家へ這入る。見ると、蒸熱い室に、六人の人間が、仕事机の周辺にいる。それは、此家の祖母、息子、娘及び二人の孫を、傍におく媳であり、各人は、何れも、同じ動物の型、即ち、馬、牛、鶏を、作るのみであつて、息子は、駱駝を、彫むのである。吾人は、吾人の眼を、信じないのであつて、四個の等しい長さの脚、隆肉を、有する、高められた胴体、短い頸、凡そ、駱駝を形成し得る人は、此の動物の、可なりの写しだけでも、會つて、見たことのある人でなければならぬ。而して、此の四十男は、一年中、是等の怪物以外に、何物をも、彫まないものである。其の他の家族員は、彼等の眼前に、毎日、見ている家畜を、彫刻して居り、祖母だけは、自然に對して、一隻眼を有しているらしく、彼女は、驚く可き繊細性と、生き写しの感じのある小羊を、彫みつつある。吾人は、持つて帰る為めに、若干のものを請うている間に、床上で彫みつつ、坐

つていた約五歳の子供に、気付かなかつた。今や、彼は、喜んで、吾等めがけて、走り来り、その作つた処の子
犬、又は、子猫に似た様な小動物を、見せて呉れた。吾人は、逍遙を、続ける為めに、その家を辞去すると、折
しも、開ける、一軒の小屋の下で、絵具壺を、もてる、一人の、若い女が、立働いているのを見受けた。それ
は、粗野な彫刻品に、色を、塗り、絵を、描く処の壺女であり、彼女の両頬は蒼白にして、落ち窪んで居る。吾
人の案内者は云う、「淡い、鉛色はれ壺女の絵てが悩んで居る」。此の婦人は約半呎の、長さの人形の木に、絵
を、描くのであるが、吾人は、彼女が、一打に對して、幾何を、作るかを、質問すると、それは、唯、数クロイ
ツアー (Kreuzer) に過ぎぬとのことであつた。

さて吾人は、此の谷の最も良い彫刻女で新鮮な顔と、聰明な目を有する、一人の女の処に来る。彼女は腕に赤
児を抱いて居るが、吾人の面前で若し人が、彼女から、その子供を、長らくとろうとすれば、吾人の面前で何か
刻まんことをすでに賛成している。彼女は粗野な木材の一片を把り、前貸人によって提出された蠟の標本によつ
一の置物を刻む。彫刻の鉄の道具を持つた指が、如何に敏活に動き、木屑が如何に飛ぶことよ。その木材は数分
て、間にして型をとり、一刻みも無駄にされなかつたのである。その小さい型は、精巧な、殆ど、指尺の高さの
ないもので、軍帽と、散弾銃とを、持つ、ナポレオンの近衛兵である。ここに、注意す可きは、一打に對して二フ
ローリン (Florin) ・七〇クロイツアー (Kreuzer) が、支払われることで、それは、実に、骨の折れる儲けである。
此の女の姉妹達と、此の家の隠居部屋に居た母とは、何れも、可なりよいものを、彫刻し、その作品は、葉煙草
のパイプ、額縁、サラダ用食器の一揃が、主なものである。彼等が、若し合目的な訓練を、受けるならば、たし
かに驚く可き芸術家になつたことであろう。然るに、彼等は、今や、一方的の老練に萎縮して了つて居る。彼等

は、蒼白に、室内色の外貌を呈し、山岳地方の人でなくして、都会の裁縫女、又は工場の女工の様である。

グレーデン（Gröden）の工業に於いて、新に目につくもの及び、此の工業が、例之、ベルナー・オーベルランド（Bernier Oberland）の彫刻業と、区別されて、不利益になることは、労働者の、比較的高い、手工上の完成にも拘わらず、粗野なこと之である。人々の悪い地位を、その欠乏せる、芸術工業上の完成と關聯せしめ、而して、此の個処に、物を改良する為めに、全力を尽すことは、明白である。然し、今日に於いても、尚お、次の様な点を抱えている多くの人々が居る。即ち、それ等の人々は、衰えている小工業には、専門学校及び教授施設によって、工業的完成を、改良することによってのみ、救済し得る道ありと信ずるのである。

さて、かかる試みは、奥国政府によって、一八二一年以来、三回に互って施行され、最後のものは、一八七二年に行われたのである。最初の両回は、「あらゆる革新に対する、人々の強固な反対」に会い、坐礁したと云うことである。一八七二年に建設され、今尚お、存続している授業施設は、人が是に期待したもの、即ち、「グレーデン（Gröden）の溪谷に於ける木材彫刻芸術を、完成する為の一施設」とは、ならなかったのである。そのことから、同所の指導者に対しては、たしかに、何等の非難が加えらる可きに非ず、又、貧しきグレーデン人に対しても、同様非難す可きではない。彼等の父よりも、よりよきものを、好んで学ばんとした学生達は、健康であった。然し、彼等は、次のことに対しては、承服し得なかつたのである。即ち、溪谷に於いて、一般的なもの、を、今や、高尚にされた形に於いて、彫むことを学ぶ。この原因は、彼等が、前貸人が、芸術的に為された「人物」及び動物群に対して、古い打壳の価格以上に、支払うことを、欲しないのを、洞見したからである。かくして、授業場は、家具及び鏡の椽、聖像及び教会用の道具の彫刻へ転向し、而かも、授業場は、是等の製品に対し

ては、困難な競争に耐えて行かねばならぬ。今や、販売に対する心配を以って、その困窮を、持っている。然し、全体の溪谷が、何時か家具彫刻及び教会の彫刻品に、移行するとは、殆ど、想像し得ないのである。又、是を望むことでもない。かかる大量生産に対しては、何処に其の引受手が、見出され得るであろうか。又、一の家内工業に対して、毎週に亘る労働と、大なる費用とを、要する商品を、指示することは、誤って居る。若し、強いてこれを行えば、家内工業の人々を、漸く、正に、前貸人に恣にせしめ、而して、彼等を純然たる無産者に化せしめるであろう。

筆者は、今、このことを更らに、評論する機会を、持たぬが、然し、次の一事は、此の際、発表す可きであろうと思う。即ち、一の沈滞しつつある家内工業に対して、活を入れんと欲するならば、先づ、販売組織から、初めなければならぬ。彼の瑞西東部の刺繡組合に見し如き、生産を制限し、労働価格を、統制する為めの、単なる聯合を、以ってして、漸く改良の為めの、一の僅なる進歩が、なされるに至つたのである。吾人は、更らに、家内工業者の中で、販売組合を組織することが出来る。又、個々の地区に対して、作業場を建設し、或いは、州をして、暫時前貸人の位置に代理せしめることも出来る。即ち、労働者自身がその商品を、中間に、第二及び第三の人を、富ましめることなしに、此の代理人に渡すのである。

然し、一八七二年以来、グレーデン (Gröden) の事情が、改良されるに至らざりしことは、次の一事實からも、充分に明かにされるであろう。即ち、単に、一八七五年乃至一八七九年の間に、此の六年間、彫刻者の賃銀が、二〇パーセント以上低下するに至つたのである。事情は、今やマイニンゲル・オーベルランド (Meininger Oberland) に於る如くに、次の様な有様である。即ち、彫刻師は若し彼等が、その労働に対して、若干でも、得

んと欲するならば、木材を盗まなければならぬ。松材は、すでに、永年に亘って、珍らしいものとなり、而して、大なる費用を以って、遠方の国有林から、もたらされなければならぬ。玩具に於いては、今や、唯、尚お、縦、えぞまつ、栗属等の、僅かの木材が使用されている。数百年に亘る濫伐によって、荒らされた森林の再興は、山岳地方に於いては、除々に行われるに過ぎずして、将来はグレーデン(Gröden)の人々に対して、悲觀的に見えるのである。

若し、グレーデン(Gröden)の人々が、今日、困窮の最下層に、沈落するに至らなかつたのは、その工業に非ずして、むしろ、行商と出稼ぎのお蔭であつて、殊に、出稼ぎの方は、二、三十年來、此の溪谷から、生むに至つたのである。首都セント・ウーリヒ(St. Ulrich)に於いては、彫刻者の、少からざるものが、自己の家屋を、所有して居り、若干の牧場と耕地とを、持つて居るのである。セント・クリスチアニア(St. Christiania)及びヴォルケンシュタイン(Wolkenstein)に於いて、事情は、遙かに貧弱であつて、此処では、多数の人は、借家に住み、而して、單に、彫刻で、生活して行かなければならぬ。座業は、伸びんとする、身体上の特質を、促進するには、適當せないのである。然し、とにかく、その住民は、零落と云う印象を、与えない。大抵の人々は、小綺麗な、清潔な態度を示し、特に、日曜日に於いて、此の印象を、深めしめる。日曜日には、小綺麗な、住民の服装が、若干の困窮を装い、その習俗上の履行には、宗教的行事の教会が、最もよい証拠を示すのである。然し、又、一面に於いて、チューリングゲン(Thüringen)の玩具製造作と、グレーデン溪谷(Tal Gröden)の彫刻者ととの間の隔りが、如何に大なりと雖も、その生活条件は、根本に於いては、同じであり、その悩みは、多分、程度の問題にして、種類の問題ではない。

而して、是等の悩み、是を、結論として、持ち出し度いのであるが、吾人が、読者を、光りに輝いているクリスマス・ツリー及び喜べる子供の歓声の祝典から、陰気な、又、悲しき真相にまで、導かなければならなかった後に、是は、玩具工業の、一の、特別な特性に非ずして、それは、家内工業一般の悩みである。

次のことは、家内工業の何れもが、持つ禍である。即ち、それが、貧乏な田舎地方の住民をして、農業に依存せしめない方法、稠密な人口の成立を、促進せしめんとするのである。是等の人口は、漸次、農業を、止め、以前の副業を、その唯一の生活部門とするに至つたのである。若し、以前に労働者が、彼が、自己の家に住み、彼の生計の一部を、農業の経費から得た故に、その工業労働を、製造費たる原価で提供し得たとすれば、今や、労働は、彼が、絶対的に、その労賃で、生活せなければならぬ故に、高くならぬのである。却つて、反対に、賃金は、尚お、働らく人々の増加した供給の下、又、不断に延ばされた労働時間の下では、低下するのである。かく、高められた生産にも拘わらず、家内工業の労働者は、その製品の消費者と、直接に、交通することが、不能である。故に、両者の中間に、彼の、商業的の中間肢節が、割り込むのであつて、是が、前貸人と、仲介業者であり、労働者は、是等に対して、依従の關係に置かれ、此の点工場労働者の担保は、尚お、恵まれていると、云う可きであらう。

蓋し、工場労働者は、単に、その労働力を、提供するに止まり、彼の、唯一の支出は、その生計及び彼の家族の生計の費用である。而して、若し、困難な不況が、發生せぬ限り、彼は、その生計を、可なり規則正しく得るのである。過勞、健康上、有害な仕事、商品で賃銀を、支払うことは、工場法によつて、保護されている。一時的の不景気は、製造家をして、その経営を、止め、又、その熟練労働者を、解雇す可く、働かさないてあらう。

彼は、その設備資本の利子を、損することを、虞れ、又、機械を、錆び朽ちしめ、工場の建物を、荒廃せしめることを、恐れるであろう。

家内工業の労働を、与える人、即ち、前貸人は、何等の固定資本を、持たず、その機械は、家内労働者である。彼は、彼等を、何時でも、活動の外に置くことが出来、而して、其の際、数ベニー(Penny)をも、支払はないのである。

勿論、是等の、活きている機械は、食へ、又、飲み、居住し、而して、衣服を、纏う。彼等は、道具及び原料に対する費用を、支弁せなければならぬ。若し、彼等が、滅落を、欲しないならば、備われずには、いられないのである。又、彼等は、前貸人の処で、パン及び塩、其の他の生活必需物資を、前貸りしているために、自由に移動することも出来ず、此の前借りは、彼等が、働くも、債務を、償却し得ないのである。家内工業の労働者は、父祖から相続した処の、借金せる小屋と土地とを以って、又、彼等の、他地方では、殆ど、望まれない。一方的の、手の完成とを以って、故郷の土地に、束縛されているのである。彼等は、最大の、生存の困窮に直面しても、万事を、寛恕せなければならぬ。又、その勤勉の成果を、労働が、殆ど、何等の収益をも、もたらさない処の価格で、渡さなければならぬ。更らに、欠損を、填う為めには、妻子をも、その労働に繋ぎ、労働日は、彼等にとつては、何等の終りをも、持たず、彼等は、肉体的に、又、精神的に、零落する。

若し、吾人が、家内工業を、理解せんと欲するならば、吾人は、一般に、輓近の営利組織の觀念から離れなければならぬであろう。此処に、吾人が、云う処の組織とは、夫が、財を、作り、是等の財は、その家族を、養う為めに必要であり、一方、妻には、家計が、委ねられ、子供達は、唯、教育費だけを、要求するのである。然る

に、あらゆる家内工業の前提は、むしろ、全体の家族、即ち、夫、妻又は子供、時には、休養を、要する祖父、祖母が、夫々、彼等の力を、営利の爲めに、合同し、而して、若し、活動者の人数が、大なる程、其の営利は、充分な結果を、得せしめないものである。子供が、未だ會つて、一度も、心配のない青年時代を、知らなかつた如くに、大人も、亦、自立及び不依存の考を、持ち得ない。而して、老年時代は、普通は、人が、その労働から離れて、休養し、子孫の幸福を、楽しむのであるが、家内工業には、このことが見られない。人は、妻を、営利の單調な仕事へ、共に、つなぎ込み得る爲めに、結婚し、又、子供が、生まれるならば、その子供が、家計に対して、幾何を、貢獻し得るか、更らに、その子供が、成長するならば、是を、営利活動に、関与せしめんとする。生れてから、死に至るまで、是等の人々の上には、一の困難な庄迫が存し、彼等の生存には、希望がなく、その生活には、将来、自立にまで、高まり得ると云う見込みが、欠けている。若し、夫婦の間に、子供が、無いならば、夫と妻の儲けは、正常な欲望の充当にも足らず、一種の生産者の生活を、延ばし得るのは、住宅と、若干の土地の所有か、補助金を、除す場合だけである。

到る処、家内工業が、提供している処の、静かな、呻吟の、暗い真相は、瑞西に於いても、亦、考られないこととは無い。此処では、輸出工業の大部分が、此の経営方法に立脚し、チューリンゲン (Thüringen) 及びチロー (Tirol) の南部に於けると、同じ現象が、瑞西の、中部の、愛らしき溪谷に於いても、見られるのである。

此処には、チューリーヒ (Thürich) の絹工業が、その生産場処の一部分を、有し、而して、普及しつつある。困窮の徴候は、近年建設された東瑞西の刺繡者及び西瑞西の時計製造家の聯盟に見られるのであるが、自力から、改良への転換を、もたらずことに、成功するか、誰が、予測し得るであらうか。

吾人が、屢々、而して、最近に至っても、再び、高められた家内工業を、採用することへの呼声、風評に對して、此の領域に於いて、為された経験を、對置し、而して、更らに、広い層に向つて、支配しつつある窮状を、排除する為めに、間違ひのない手段が、採られるのは、家内工業ではないと云う信念を、拮めるのである。

貧寒な農事情を、単に、家内工業を、導入することによつて、排除せんとせば、それは、貧困を、困窮と交換する以外の、何ものでもないと云うことを、結論としたいのである。